

朝鮮通信使饗応食について（第1報）対馬易地聘礼にみる饗応食

長崎女子短大 ○大坪藤代 香川大教育 宮川金二郎

目的 江戸時代国交のあった朝鮮より12回の通信使来聘があり、うち11回は対馬、江戸（日光）を往復し、幕府および沿道諸藩の饗応を受けた。また、最後になった文化8年の聘礼は対馬で行われたが、いずれのときも対馬藩では下舟宴、上舟宴など通信使への饗応を催してきた。殊に対馬易地聘礼では幕府にかわって饗応の準備を整えたが、これらの饗応食は国富の誇示の意向もあり、最高のものであったと考えられる。一方文化文政期は本膳料理の完成期ともいわれ、この饗応食の復元を試みることは江戸時代の料理形式を知る上で重要であると考えられる。

方法 対馬に残されている宗家文書を主に、諸藩の古文書より分析した。

結果 文化8年の易地聘礼の饗応食の膳立は、宝暦通信使までの江戸城内のものと同様の膳立で、三使に対しては七五三本膳式で行われた。すなはち、式三献および七五三の三膳に四つ目、五つ目の膳、押三方、六角折三合、二つ星物、三つ星物、菓子などよりなる。対馬藩饗応の膳立もほぼ同じであるが、料理の内容は若干異なる。これらの饗応食の準備、諸道具、魚菜などの材料注文、係員割当などは文化6年より始められていることが明らかとなった。